

第37回全国中学生人権作文コンテスト中央大会における入賞作品概要（11作品）

1 内閣総理大臣賞 みんなと一緒に高校生になる

おおはらかの

兵庫県・神戸市立垂水東中学校 3年 大原 佳乃

難病と闘う作者は、絶対に高校に進学したいと思っている。しかし、作者のような生徒を受け入れる設備や体制が整っている高校は多くない。障害者差別解消法の施行により、「必要かつ合理的な配慮」が規定されたが、実現されていると言えるのだろうか。勉強したいという意欲があれば、障がいがあっても安心して進学できる支援を受けられる社会になってほしい。「電動車いすの高校生」にみんなと一緒にになりたい。

2 法務大臣賞 知的障害者の災害時の避難

いしかわさとし

愛知県・刈谷市立朝日中学校 1年 石川 叡

学校で災害への備えについて勉強した作者は、自閉症の弟がいる自分の家族は災害時に避難所でうまく暮らせるのか不安になった。インターネットで調べても、自閉症の子どもを持つ家族は、他の人に迷惑をかけることを懸念し、避難所に入ることを遠慮してしまうことが多いと知り、解決策を考える。普段から弟のことを地域の人にもっと知ってもらって、自閉症の子どもの行動を理解してもらいたい。弟のことを地域の人たちに発信し、障害者も安心して暮らせる地域を築きたい。

3 文部科学大臣賞 地球人でええやんか

きだ みはゆ

滋賀県・東近江市立朝桜中学校 1年 木田 美映ミシエル

日本人の母と日系ペルー人の父を持つ作者。道ですれ違った人に「あなた何人？」と聞かれて「日本人」と答えたところ笑われた。不思議に思い、母に話すと、「あんたは地球人やねん」「地球人でええやんか」と答えた。当初は、その答えに納得できなかったが、姉から、作者が小さかった頃、父が外国人を理解してもらうために色々な活動をしていたことを、母から、その当時の父の決意を聞き、母の言った「地球人でええやんか」の意味を理解する。

4 法務副大臣賞 私が私でいるために

すがのりこ

栃木県・栃木県立岡本特別支援学校 3年 菅野 莉子

病気をきっかけに自分の意志で特別支援学校に転校した作者。転校後は、転校前にはできなかったことができるようになり、転校して良かったと感じている。しかし、特別支援学校への転校をあまり喜んでもらえなかったり、特別支援学校に通っていることを人に話すと「大変ね」と言われたりする。特別支援学校のことを勝手に「可哀想だ」「行かない方がいい」と決めつけないで欲しい。その場所で、「自分の力をつけている子がいること」「楽しく学習している子がいること」を忘れないで欲しい。

5 法務大臣政務官賞 髪がつなぐ思いやり

せきね ゆうり

埼玉県・行田市立長野中学校 1年 関根 悠里

小学生のとき、病気で髪がない子の写真を見た作者は、祖母から「ヘアドネーション」を教えてもらい、3年半髪を伸ばし、病気で苦しむ人たちのために髪の寄付をした。私たちは、無意識に自分と違うものに偏見を持ってしまいが、些細なイジメや、テロや戦争も、他を受け入れられないことから起きているのではないかと考える作者。ヘアドネーションを多くの人に知ってもらい、病気で苦しむ人たちが、少しでも前向きになり、笑って過ごせる世の中になることを強く願う。

6 全国人権擁護委員連合会会長賞 「私のルーツ」 よしはら なお
佐賀県・唐津市立浜玉中学校 3年 吉原 直
自分のルーツは満州にあるという作者は、旧満州で生まれた祖父から、直接、戦争体験について聞いたことはなかった。しかし、祖父の姉の著書を読み、旧満州からの引き揚げの過酷な体験を知る。戦後70年が過ぎ、「引き揚げ」という言葉が死語になろうとしている中、この歴史を語り継ぎ、平和な世界の実現のために、私たちができることをしっかりと考えていきたい。

7 一般社団法人日本新聞協会会長賞 幸せを実現するために おのうえ えりか
三重県・大台町立大台中学校 2年 尾上 恵里佳
祖父が他界したのは作者が3歳のときであった。祖父の遺体の前で叔父が握りこぶしをつくって泣いていた姿が、作者の脳裏には映像のように残っていた。中学生になり、事故で右手を失った叔父と叔母の結婚に至る経緯を聞き、作者は祖父への敬愛の気持ちと叔父や叔母の強い覚悟を想像した。祖父が望んだ差別や偏見という境目のない世界を、次は自分が作ると祖父に誓う。

8 日本放送協会会長賞 概念を取り払って かねこ かのん
千葉県・木更津市立木更津第一中学校 3年 金子 華音
小学生のときは、男の子のような服装をし、髪も短かった。男の子と間違えられることも多かった。そんな作者も、学年が上がるにつれて、魅力的な女性になりたいと思うようになった。今の自分があるのは、ありのままの自分を受け入れ、自由にさせてくれた周りの人のおかげだと考える。「女だからスカートを履け」「男なら強くなきゃ」というような固定観念は取り払うべき。それぞれの個性を受け入れて、その上で自分の世界を広げることができたら、もっと良い世の中になるはずだ。

9 法務事務次官賞 誰にも同じ生きる価値 よしい はるか
神奈川県・海老名市立海老名中学校 3年 吉井 遥香
相模原で多くの障がい者の命が奪われた。犯人は「障がい者は、生きている価値がない。親がかわいそうだ。だから安楽死させる」という考えのもと、犯行に至ったという。知的障害のある妹をもつ作者は、この犯人の考えに疑問を投げかけ、障がい者と健常者の生きる価値に違いはないこと、もっと障がい者と交流を深めるべきであることを訴える。

10 法務事務次官賞 自分にできること たけむら まな
三重県・志摩市立大王中学校 2年 竹村 真那
「おなごはやぐらへ上がるもんじゃない。」小さい頃、地区の盆踊りで、ある人からそう言われた作者は、そのきつい言葉に悲しくて泣いてしまう。その後、恐怖でやぐらへ上がれなくなってしまったが、「女だからやれないという考えはおかしい」との言葉に勇気づけられ、またやぐらへ上がれるようになった。「男だから女だから」という考え方のために、傷付いている人は他にもいるかもしれない。みんながこの考え方から抜け出すことが必要だと作者は考える。

11 法務事務次官賞 「同じ空の下で」 なかもと かなさ
宮崎県・宮崎第一中学校 2年 仲本 愛
国際交流事業で韓国に行った作者は、韓国での様々な経験を通して、これまでの自分の視野の狭さや無意識に住みついていた韓国への偏見に気がついた。自分の思いだけで判断し、近寄ろうともしない、知ろうともしないことが、「偏見や差別」につながっていたのだ。「知ること」の大切さを心に刻みながら、明日への扉を開いていこうと作者は思う。